

文科系と理科系が融合するところ 心理学と現代教育論の魅力

ページ内索引

文科系理科系が融合するところ

数学の生きる文系学問 臨床心理学

東大の学び 講義紹介 現代教育論

東大教師が新入生にすすめる本

研究の鉄人 臨床・異常心理学 研究・実践の両面から心をとらえるー

教育学の学び方 ー手作りの設計図のすすめー

東大教師が新入生にすすめる本

時に沿って 青年期の終わりと始まり

文科系と理科系が融合するところ

丹野義彦（生命環境系／心理・教育学教室）

（東京大学教養学部報 2013 年 6 月号から引用）

心の不適応の予防と治療

いじめや自殺など世の中にはさまざまな精神病理があり、マスメディアに取りあげられない日はありません。そうした現象の背後にはどのような心理が働いているのでしょうか？ 人はなぜ落ち込んだり不安になったりするようになるのでしょうか？ 私の研究室では、そうした異常心理学の研究をおこなっています。日常生活でよくみられる精神病理として、不安・抑うつといったネガティブな感情とか、妄想や幻覚などを取りあげています。こうした現象は、感情と認知の一定の交互作用から生まれてくるものであり、その心理学的メカニズムを探り、予防や治療（認知行動療法）について科学的に調べています。こうした病理現象は、生物学レベル、心理学レベル、社会学レベルといったさまざまなレベルが組み合わさって生じるものであり、どれかひとつのレベルだけで説明できるものではありません。「生物・心理・社会の統合モデル」を解きほぐしていく作業が大切です。

「異常心理学」というと、これまでは病院でのケーススタディ（個別事例の研究）が中心であり、哲学的な用語を使った難解な学問とされてきました。私の研究室では、哲学的でなく科学的な異常心理学を構築していきたいと考えています。とくに重い精神病理を持たない人を対象とした研究（アナログ研究）を大きく取り入れています。方法としては、構造化面接法や質問紙法を用いて大量のデータを取って統計的に解析したり、実験法を用いて仮説を検証する方法を用います。8000 名に達する駒場の学生や院生のメンタルヘルス向上に貢献できるような仕事を心がけています。

心はホットに文科系、頭はクールに理科系

私は統合自然科学科の認知行動科学コースに属していますが、このコースは人間を含めた動物の認知や感情の成立の仕組みを総合的に研究することを目的としており、文 I から理 II の人まで、いろいろなバックグラウンドを持った人がいます。私の中心となる学問は心理学ですが、心理学はもともと文科系と理科系の境界にあります。私の研究室のキャッチフレーズは、「心はホットに文科系、頭はクールに理科系」というものです。和魂洋才ふうに言うと「文魂理才」でしょうか。「心のない」学問や「頭のない」学問にはならないように心がけています。みなさんの中で、もし「文系に行こうか、理系に行こうか」と迷っている人がいたら、心理学を候補に入れてください。

心理学との出会い、心理学の面白さ

自分の将来の進路を決めるのはなかなか難しいものです。私自身もとても迷いました。私は高校までは理科系で、飛行機を作るエンジニアにでもなろうと思っていました。

た。しかし、高校のころ、自分の性格のこととか、対人関係のこととかで、頭の中がごちゃごちゃしてきて、心の問題に興味を持つようになり、心理学に進みたいと思うようになりました。心理学は文学部や教育学部に属していますので、高3の終わり頃に、理科系から文科系に移りました。文科Ⅲ類の時代は、文学系の友達の影響もあって、文学の同人誌を作り安部公房のような小説を書いたりしました。3年に心理学科に進み、研究テーマを探していた時に、医学部の幻覚剤の実験に参加し、心の奥底をのぞくような体験をしました。これがきっかけで、精神病の体験と認知についての研究をして卒業論文と修士論文を書きました。博士課程はさらに精神医学を勉強するために医学部の大学院に進み、これがライフワークとなりました。その中で、青年期の精神病理に興味を持つようになり、現在の異常心理学の研究へとたどりつきました。

あっちへ行ったりこっちへ行ったりしたのですが、文科系と理科系の両方の経験が生きているという実感があります。高校時代には、「数学なんて自分には何の役に立つのだろう」と疑問に思いながら数Ⅲの問題を解いたりしていましたが、数学は自然科学的な考え方の基礎となり、今ではとても役に立っています。また、駒場で小説を書いたりした経験も、青年期の心理を理解する上で非常に役に立っています。この文章が、なかなか進路を決められない駒場生に少しでも役に立てば幸いです。

数学の生きる文系学問 臨床心理学

(東京大学新聞 2013年3月2日号から引用)

心理学は「心の理学」だと話すのは丹野義彦教授(総合文化研究科)。心理学は文理融合型の学問であるという。専門は精神的な健康の回復や保持を目指す臨床心理学。カウンセリング中心の心理療法、心理テストやアンケートなどを用いる心理アセスメント、うつや不安障害などを研究する異常心理学に大別される。

「例えばスクールカウンセラーは文科系と思われがちですが、数理的な手法をよく用います」

と丹野教授は語る。人間の心という目に見えないものを数量化することで、客観性を保証すると同時に、治療の効果がどのくらい出ているかを確認するためだ。例えば、心理アセスメントで用いられる心理テストやアンケートの結果は統計的に処理される。

心理療法における効果量は次の公式で定められる

(式)。

効果量を求めることで、ある心理療法を用いた場合に治療効果があるかやその大きさを測定できる。標準偏差とは複数の数値の散らばり具合を表す指標の一つ。効果量はこの標準偏差を1単位として、治療でどの程度平均値が動いたかを表す。標準偏差で割ることで、尺度を統一できるので、どんな心理療法でもどんな症状でも適用可能になる。ある心理療法の効果量を調べて、値が0ならば「効果なし」、プラスの大きい値ほど治療効果が大きい。マイナスならばその治療はむしろ逆効果となる。

具体例として「恐怖症」と「不安・抑うつ」に対して、「行動療法」と「認知療法」の二つの心理療法を考える。行動療法は不適切な行動を矯正させるのに対し、認知療法は行動のきっかけとなる出来事への認知を改善させる治療だ。

各症状に二つの心理療法を行うと、それぞれの効果量が求められる(表)。「恐怖症」に対しては行動療法が、「不安・抑うつ」に対しては認知療法がより効果であったことがわかる。このように効果を数値化することで、心理療法の効果の大きさが可視化され、複数の心理療法の中から最善の治療を選択することもできるようになる。丹野教授は「数学が臨床心理学を支えていると言っても過言ではないでしょう」と話す。



心を失った心理学はもはや心理学ではないし、客観性を失えば学問として成立しない。文科系・理科系双方の知をバランスよく鍛えることが重要だと丹野教授。

「心は文科系、頭は理科系と両方持ち合わせるのが理想でしょうね」

東大の学び 講義紹介 現代教育論

(学生が作る東大ホームページ U T - L i f e 2006 より引用)

今回の講義紹介では、毎学期開講され、非常に多くの受講生を誇る人気授業「現代教育論」を紹介する。講義を担当する教員の一人・丹野義彦教授にお話を伺った。

「現代教育論」で扱う領域

基本的に現代教育論がどういう授業かということ、現代の教育で、どんな事が問題になっていて、どういう風にしていくべきかを幅広く考えていく授業です。校内暴力・管理主義・いじめといった小中学校で問題になっていること、神経症・対人不安という臨床心理学の基礎的なこと、それから世界の教育・大学入試・一般教育のような教育社会学的な問題、大きくその3つに分けて話をしています。

教養学部の授業には3つの使命があります。一つは専門に対する基礎教育という面です。3,4年生で本郷の専門学部に進んだときの為の基礎になるような事を、1,2年生のうち駒場で勉強するという事です。現代教育論においても、例えば教育学部に進もうとする人が、駒場で教育学などの基礎になる事を勉強します。同じように理学部なら自然科学の基礎を駒場で学ぶでしょうし、医学部だったら医学の基礎の勉強をするわけです。二つ目は教養教育ですね。専門学部に進む前に、世の中のいろんなことを幅広く勉強して、本郷でどんな学部に進んだとしても一般教養として知っておくべきことを身につけるという事です。現代教育論で言えば、今日本の中で教育のどういことが問題になっているかを学生に知ってもらおうということですね。あともう一つ、駒場の授業は本郷の専門学部の出店みたいな側面を持っていて、専門への入門教育としての役割を持っています。自然科学なら「理学部でこういう研究をしているから面白そうだ、こういうことをやったらどうか」というのを出店的に宣伝するんですよ。同じように教育学部の出店として教育学の授業があるので、現代教育論を聴いて、「教育学部ではこんな面白い事をやっているんだ、教育学部へ進みたい」と学生に思ってもらえるような、本郷の授業のサンプルになることをやっています。このように、教養学部のどの授業でも多かれ少なかれこの3つの使命があって、特に二つ目の教養教育の比重が最も高いかなと思います。

専門分野と講義との関連

私は臨床心理学や教育病理学を研究しています。臨床心理学というのは心理学を応用して心の問題を持った人への援助をしていく学問です。臨床心理学の対象は中学生・高校生・大学生という青年期の方が多いんですよ。ですから必然的に学校教育の問題とどうしても関わらざるを得ないわけで、その点で関連があるということですかね。

いじめなんてのは最近非常に問題となっていますよね。でもいじめというのは昔から問題があったわけで、私が大学で学生相談やカウンセリングをやっていると、中学校時代に友達から受けたいじめが大学生になっても大きなトラウマになっている人がたくさんいるんです。学校での問題が今の青年の心の健康に非常に大きな影響力を持っていると思うんです。そういうわけで臨床心理学を生かして、現代の教育の問題に役に立てています。無味乾燥で誰も興味を持たないようなオタク的なことを象牙の塔の中で研究するだけではなくて、アップ・トゥ・デートな今の日本の社会で問題になっているような事を研究したいと思っています。

社会問題と東大

教育の問題というのは社会的な問題そのものなので、まさに教育を知るということは社会を知るといことだと思えます。ですから私がやっている現代教育論の授業はかなりの部分が社会を知ることが目的となっているといっても良いでしょう。講義で取り上げる話題はどれも日本の社会の中の大きな問題なので、そういうことを知ってもらうのは、まさに今の日本の問題を知るといことだと思えます。

2つほど例を挙げるならば、いじめの問題とオウム真理教の問題ですね。いじめの問題が最近テレビや新聞に毎日のように出ています。私はここに赴任してからずっといじめの問題を取り上げていて、いじめに関するアンケートなどをしてきたんですね。その結果東大生でもいじめの被害・加害の経験があり、いじめの当事者になるということが分かってきました。東大生はいじめとは関係がないように思われたり、あるいは人をいじめて上手くのし上がってきたんじゃないかという風に思われたり、いろんな見方があると思いますが、全然そんな事はなくて、普通の人と同じようにいじめたりいじめられたり、一般の傾向と同じような傾向がはっきり分かるということです。

もう一つ、1995年にオウム真理教が地下鉄サリン事件を起こして、東大の駒場キャンパスがカルト宗教の草刈場になっているというのが報道されたんですね。麻原彰晃が駒場祭の時に900番教室で講演をした事があったんですよ。当時はオウム真理教は多少危ないけど普通の宗教団体だとみんな思っていたのですが、その後すぐにああいう大事件を起こして捕まりました。その時、東大生がなぜオウム真理教に惹かれていったかということが当時非常に駒場キャンパスの中で問題になりました。オウム真理教に入信した東大生はたくさんいたし、幹部の中にも東大生が数多くいました。私は、駒場の教養学部の雰囲気の問題なんじゃないかと思ひまして、色々調査しました。駒場キャンパスというのは非常に特殊なキャンパスで、言わばほったらかしですよ。他の大学は教養学部がなくなっているので、みんな入ったときから同じ学科の小さな集団の一員ということで仲間ができるんです。それに対して、東大は文一・文二・文三などの科類に何百人単位で入ってきて、一応クラスはあるけどそれほど機能していなかったりする。そのために駒場に来ても居場所がないという学生がたくさんいると思うんですよ。駒場キャンパスのそういう雰囲気が、メンタルヘルスやアパシーの

問題を増やしていたり、あるいはカルト宗教の中に居心地の良さを見出す人達を増やしていくのではないのでしょうか。そういうことを何とかするために東大も色々と工夫をしていますが、駒場キャンパスの特殊性というのは問題だと思いますね。

そもそも教養教育というやり方は、アメリカでは成功を収めていたんです。少人数制のきめ細かい授業で、個人のあらゆるニーズに対応しているからです。でも、日本ではその教養教育を大人数制の講義で行っているから、あまり上手くいっていないんです。その点においても、私は駒場の教養学部の制度に疑問を感じています。

講義をする上での工夫点

講義は毎日のことなので、毎日何かしら工夫をしているといえばしているんですけどね。3つ例を挙げるとするなら、まず初回の講義でアンケートを取って、教育の中のどういう事に興味があるかというのを聞いて、その結果を参考にして授業の内容を決めています。日本の教育史や教育思想・教育哲学などのいわゆる教育学というのが最も中心的な学問なのですが、残念ながらこういうものに対する興味は非常に低いので、現代の身近ないじめとか校内暴力とかについて話すようにしています。初回のアンケートは学生がどういうことに興味を持っているかを授業に反映させるのに非常に役立っています。

もう一つは、私自身の研究の為に、授業中に頻繁にアンケート調査をしています。折角の授業の時間を削って学生さんにやってもらうのは本当は悪い気がするんですが、アンケートの結果を個人的に知りたい人には後でフィードバックしたり、調査の結果をまとめてお知らせしたり、出来るだけ研究用の調査を学生さんに還元するようにしています。

あとは、オフィスアワーとあって、授業とは別の時間を設定しておいて、その時間は授業の質問やよろず相談や雑談に応じるようにしています。

私は現代教育論を15年ぐらい教えているので、最初のうちは毎年毎年いろんな工夫をしていたんですが、最近はマンネリ化してきてあまり工夫をしていないですね。年とともにルーティン仕事みたいになっていまして（笑）。駒場の先生もすごく忙しくなって、昔は前期課程の授業だけをしていれば良かったんですけど、それが大学院も後期課程もできて、教育の仕事がだんだん増えてきたので、残念な事に1,2年生の授業ばかりに時間を割くわけにもいなくなってきました。教養学部の1,2年生を対象とした授業はそれぞれ面白い所を持っていると思うんですよね。高校から出たての人に大学で教育を教えると、皆さんすごく興味を持って聴いてくれます。あとは大学院で教えるというのも非常に面白い仕事で、専門的なことを自分の研究室の中で5,6人を対象にしてインテンシブにディスカッションをして、それなりに面白さはあります。でも残念なことに時間がなくなっていて、それぞれの授業に工夫する時間がなくなっているんです。でもやっぱり研究と教育というのは車の両輪のようなものなので、

教育に専念するとマンネリ化するだろうし、研究に専念してもあんまり良くない。やっぱり忙しいけれども両方やっていくというのがマンネリ化しないための良い方法だと思っています。

文系的発想と理系的発想

文系の学生さんも理系の学生さんも小・中・高の学校社会を経験してきたわけですし、また東大という学歴社会の中にいるわけですから、文理を問わず教育が東大生にとっての大きな関心である事は間違いないと思います。それに私のやっている心理学は文系的なところと理系的なところを両方持っています。一見すると現代教育論や心理学は文系的な学問だと思われがちですけど、かなり理系的な発想で研究をしているんです。理系と文系を対立的に捉えないで、両方のいいところ取りをしているような気がします。

私自身は高校では理系にいて、東大では文科三類に入って心理学を学び、大学院では医学部に入るといって、理系と文系の間をふらふらする様な進路をたどってきました。教育学は完全に文系の学問なんですけど、それでも文系的な発想より理系的な発想で考えたいと思っているし、今の私の専門である臨床心理学でも、文系的な面と理系的な面が半々です。両方の発想が必要なので、どちらかに偏ってしまうと非常に偏った学問しか出来ないんですよね。だからむしろ両方のいいところ取りをするように、「心はホットに文科系、頭はクールに理科系」というキャッチフレーズで研究しているので、文科系・理科系を分けるという発想はあまり持っていません。心のない心理学や頭のない心理学にはなりたくないんです。学問というのは、いじめの問題にしる精神的な問題にしる心の問題なので文科系的なところがあると思いますが、あまり文系的なところに入ってしまうと、クールさが無くなり、対象との距離が取れなくなって上手くいかないんですね。理系的に物として距離をとって観察する態度をつけるといいんです。かといって人間の問題なので遠くから見すぎてしまうとあまり臨床心理学といえなくなってきて、治療などが出来なくなるので、適度な距離を保ちつつ共感の態度を取らなきゃいけない。両方が必要なんですよ。できるだけクールに観察したり分析したりする姿勢は見失わないで欲しいです。だから、駒場で文系と理系が共に学ぶのも、「心は文系、頭は理系」というのを身につけて欲しいということでしょうかね。

内容が多彩な「現代教育論」

現代教育論は、数人の先生がそれぞれ違った内容で授業をしています。一つの理由としては、非常に受講生が多いことですね。数年前までは毎年 800 人とか 600 人とかが集まって、かなりの大教室で授業をしていました。これじゃまずいというので、非常勤講師の先生にお願いして授業数を増やして、一つの授業あたりの受講者数を減らして、少しは過密授業を解消できたところはあると思います。

また、教育の問題には色々な視点があるので、いろんな先生に教育を論じてもらいたいと思って、多彩な先生にお願いしているということもあります。毎年教育学系の先生と心理学系の先生にお願いして、異なる立場で広い視点から授業をしていただくという事を目指しています。理系の科目、例えば〇〇力学だったら誰が講義しても同じ内容だと思うんですけど、文系の学問はどんな視点から見るとによっていろんな考え方が出てくるので、多彩な先生にいろんな角度からお願いした方がいいかなと思っています。

平成 17 年度までは現代教育論は一つの科目でしたが、平成 18 年度に駒場のカリキュラムが変わったのを機に、「現代教育論」と「教育臨床心理学」という 2 つの科目に分かれました。もっと増やす事も考えたのですが、それだと先生が足りなくなってしまうので、今はこれが精一杯かなと思います。もっと教員が増えたら、さらに科目を細分化して、学生がこれらの授業を多く取れるようにしたいですね。

学生に伝えたいこと

教育の問題というのは非常に身近で面白いので、是非興味を持ってもらいたいです。特に東大の学生は学歴社会の頂点にいるわけですから、そういうことを知ってほしい。学歴社会がどういう問題を起こしているかというのを、ピラミッドの頂点にいる人にはぜひ理解して欲しい。今教育の底辺で起こっている校内暴力や非行やいじめについて理解して欲しい。現代の教育問題に学生のうちから興味を持ってほしいという事です。そして、興味を持った人は是非教育学部に進学して欲しいと思っています。

学生の中には、メディアに就職したり官僚になったり医者になったりする人がたくさんいると思うので、そういう人には是非教育現場の問題を知ってほしいかなと思います。特にメディアに行った人には教育を広く知って欲しいという気がします。教育問題に対する報道を見ていると、必ず学校側が槍玉に挙げられて、「何で先生がしっかりしないんだ」とか言われて、あるいは教育委員会や文部科学省に非難が浴びせられる。そればかりなので、これは非常に一面的だと思うんですよ。やはり子どもというのも非常に悪いところやずるいところを持っていますし、いじめ問題において明らかに悪いのはいじめる子です。それを放っておいて、「何でいじめを止められなかったのか」と先生ばかりを悪者扱いするのが私には不満なんです。いじめるという事がどうして子どもの間に広まったのか、どうして子どもはいじめを面白いと考えるようになったのかというのを考えないといけない。そうになると、テレビのお笑い番組とかで「いじめは面白い」というメッセージを流しているわけですよ。漫才やお笑いのブームのおかげでテレビが繁栄してきたというのもあるので、やはりメディアにも子どもに対する責任の一端があるわけですよ。いじめが面白いというのは子どもの価値観が変わってきたというのもあると思うんですけど、そこを変えてきた原因の一つがメディアであることを反省しつつ、学校もきちんとやってほしいというなら良いんですけど。要するにメディアが教育問題を取り上げると非常に一面的になる傾向

があるので、現代教育論の授業を聴いている人はそういう一面的な報道に惑わされな
いで、教育問題をもっと広い目でいろんな観点から見られるような視点を持って欲しい
というのが一番学生に望みたい事です。

取材後記

おめでたいことに取材の数日前に教授になられたという丹野先生でしたが、講義の内
容を語りつつ、現代の身近な社会問題についても広く語っていただきました。こうし
た社会問題が教育と密接に結びついていること、そして教育が様々な形で社会に影響
している事を感じました。UT-Life もメディアたるもの、もっと多様な視点から東大
の学びを捉えていければと思います。

東大教師が新入生にすすめる本

丹野義彦（総合文化研究科）

（東京大学出版会UP選書 2005年4月号から引用）

①私の読書から 印象に残っている本

小此木啓吾『対象喪失』（中公新書 1979）

河合隼雄『ユング心理学入門』（培風館 1967）「河合隼雄著作集第1巻（岩波書店, 1994）」に収録。

学生時代に、小説だけしか読めなくなり、専門書が読めずに困った時期がありました。その時に読んで癒されたのがこの2冊です。前者は、フロイトの心的外傷や悲嘆の研究について、後者は、フロイトと並ぶ精神分析の巨匠ユングの理論について解説しています。両方ともわかりやすく、読んで悟るところの多い本で、今でも色あせていません。

②これだけは読んでおこう 研究者の立場から

辻平治郎『自己意識と他者意識』（北大路書房 1993）。

私自身が大きな影響を受けた本です。ユングの内向性と外向性という概念を、臨床社会心理学の自己意識と他者意識の理論でモデル化し、そこから精神病理を解き明かすという骨太な本です。単なる思弁ではなく、実証できる形で提示した点が画期的です。

ドライデンとレントゥル『認知臨床心理学入門』（丹野義彦監訳、東京大学出版会, 1991）

大学院生レベルの教科書。不安障害・抑うつ・統合失調症などについて、認知行動理論と認知行動療法の最先端の臨床と研究を紹介しています。精神科関係の臨床家にとっても役立つでしょう。「日本語で読める文献案内」がついています。

③私がすすめる東京大学出版会の本

坂本真士『自己注目と抑うつの社会心理学』東京大学出版会 1997

石垣琢磨『幻聴と妄想の認知臨床心理学』東京大学出版会 2001.

新進気鋭の若い友人2人の著書を紹介します。前者は、自分について考え込むことが抑うつをひきおこすことを、社会心理学の手法を用いて解明したものです。後者は、幻聴と妄想という精神病の症状について、数量的な方法で構造化し、そこから治療法を考えた本です。前者は基礎から臨床への仮説検証型、後者は臨床から基礎への仮説生成型という研究スタイルをとりますが、いずれも研究のエスプリが伝わってくるスリリングな本であり、大学院や臨床現場での研究のモデルとなるでしょう。

下山晴彦・丹野義彦（編）『講座臨床心理学（全6巻）』東京大学出版会 2002

日本の臨床心理士の活動は、社会的に広く知られるようになりましたが、臨床心理学はこうした状況に対応できていないといえます。こうした危機感から、臨床心理学の枠組みや体制を整えていくことをめざして本講座が作られました。日本の臨床心理学の10年後、20年後を見すえ、実践や研究のあるべき姿や可能性が6巻にまとめ

てあります。

横田正夫・丹野義彦・石垣琢磨（編）『統合失調症の臨床心理学』東京大学出版会 2003

以前、東大出版会から出ている精神医学の名シリーズ『分裂病の精神病理』によって統合失調症の世界の奥行きを知った研究者はたくさんいます。私もそのひとりです。これに対して、臨床心理学からの新しいアプローチをまとめたものが本書です。

「叢書・実証にもとづく臨床心理学」の最初の巻でもあり、この叢書には、サイエンスとしての臨床心理学の精華がまとめられる予定です。

④私の著書

丹野義彦『エビデンス臨床心理学』日本評論社 2001

大学後期課程レベルの教科書。異常心理学の研究のダイナミズムと面白さを伝えたいと意気込んで書きました。前述のドライデンの『認知臨床心理学入門』と、次に述べる『自分のところからよむ臨床心理学入門』とあわせて、3部作となります。もし、本書で物足りなければドライデンへと進み、難しすぎたら『自分のところ』へ戻る仕組みです。

丹野義彦・坂本真士『自分のところからよむ臨床心理学入門』東京大学出版会 2001

大学前期課程レベルの教科書。はじめは、「自分の心からよむ異常心理学」というタイトルを考えていました。異常心理は、決して特殊な現象ではなく、万人の心の中に潜んでいることを示したかったからです。心理テストの実習によって、自分の心の中にある「異常」の芽を見つめ、そこから現代の社会臨床心理学の中心的なテーマへと誘います。

研究の鉄人 臨床・異常心理学

－研究・実践の両面から心をとらえる－

広域科学専攻 丹野義彦 助教授

(『東大は主張する 2003-04』東京大学新聞社より引用)

●研究内容

丹野助教授は、心理学の中でも異常心理学と臨床心理学の2分野を研究している。異常心理学とは、うつなどの人間の特殊な心理状態がどのように起こり、またいかに予防できるかを調べる学問である。さらに、そうした分析を受けて、特殊な心理状態に陥った人に対する治療法を模索するのが臨床心理学だ。研究の応用例としてはうつ病や統合失調症などの異常心理の治療、カウンセリングさらに健康な人のストレス対処や精神面での健康維持などが挙げられる。

これまで日本の心理学研究は、京都大学の河合隼雄教授などによるユングやフロイトの流れを受けた精神分析がほとんどだったという。研究の中心は病院や施設でのケーススタディであり、哲学的な用語を使った難解で文学的な精神病理学が作られてきたそうだ。しかし、丹野助教授の研究室では「科学的」であることが重要視されている。「患者や大学生などの健常者に対する面接や質問紙を通して数理的なデータを集め、それを統計的に解析したり、実験を用いて仮説を検証するといった研究手法を用いています」と丹野助教授は説明する。

●研究分野の魅力

大学4年生のとき、丹野助教授は医学部の精神科で行われていた幻覚剤の研究に被験者として協力した。幻覚剤を飲んだときに感じた非日常性や恐怖、不安はとても強烈なものだったそうだ。この体験がきっかけで、丹野助教授は妄想や幻覚などの統合失調症の研究をするようになったという。「心がこんなにも奥深いものだと身をもって知りました。異常心理学では研究を自分の心理的な問題に引き付けて考えることができるのが魅力です」と丹野助教授は語る。

●今後の展望

日本ではあまり定着していない科学的な臨床心理学を広めていくのが、丹野助教授の現在の課題だという。

「欧米では臨床心理学者は科学者であり、回時に実践家であることが求められます。私自身も学生相談所の顧問をすることで、実践的で『生きた』研究を目指しています。今後さらに、欧米から有名な研究者を招いて講演を開くなどしてこうした考えを広めていくとともに、臨床心理学のこれからの研究モデルとなるような研究をしていきたいです」

●研究者を目指す人へ

この分野の研究者に望まれることは、論文を読み書きする能力や研究意欲などはも

ちろんのこと、患者の治療に携わる者としての深い人間性なのだという。「学問として研究対象と適切な距離を保つことは欠かせませんが、一方で特殊な精神状態に陥ってしまった人に対する共感や思いやりの気持ちもたいへん重要なのです」

教育学の学び方 ー手作りの設計図のすすめー

丹野義彦（教育学）

（東京大学教養学部報 1993 年 1 月号から引用）

●目的意識

なぜ教育学を学ぶのだろうか？ 「研究者になりたい、教職につきたい、教員免許を取りたい」など教育学を専門とするために学ぶ人もいるだろうし、「自分なりの教育観を持ちたい、教育という制度に興味がある」といった知的動機や、あるいはただ『教育学』の単位が欲しいという受動的な動機から学ぶ人もいるだろう。

教育学というとすぐ「学校教育」を思い浮かべるが、実際の教育学は「家庭教育」や「社会教育」など、広い領域を含んでいる。したがって、教育を学ぶことは、自分のこれまでの自己形成のプロセスを問うこと、すなわち自分自身を知ることにはかならない。教育学を学ぶ目的のひとつはここにある。

●問題意識

教育学に対する興味は多様である。教育学は、人文科学（教育哲学・教育史など）、社会科学（教育社会学・教育行政学など）、自然科学（教育工学・教育情報学など）、の3つの方法論すべてを含む学際的な（何をやっても怒られない）総合的な分野である。最近では、環境教育・情報教育・国際教育・大学（院）教育・性教育・消費者教育などが大きなテーマになってきている。

また、新聞をみれば、受験・偏差値・学歴社会・大学での不祥事・学校の管理化・体罰・不登校・いじめ・非行・青少年の犯罪など、残念ながら圧倒的に病理現象が多いものの、教育関係の記事を見ない日はない。（講義の最初に、教育学のどの領域に興味があるかを諸君に書いてもらったが、教育病理と大学の問題がトップを占めた。ちなみに教育学のイメージを書いたら、最も多かったのが「難しい、固い、机上の空論」というものであった。）

このように、教育はいかにあるべきかという問いは現代の大きな問題のひとつであり、研究者や学校関係者だけでなく、一般市民にとっても強い関心事となっている。

●論理体系作り

教育学に限らず、自ら学ぼうとすることは身につくが、受け身で教わるものは身につみにくい。漠然と講義をきいたり本を読んでも成果は少ない。一般に、「わかった」という気になるのは、自分なりの論理体系を組み立て、それを自由に使いこなせた時である。講義や本は、講師や著者が「私はこう理解している」という論理体系を紹介しているにすぎない。いわば他人の思考形態を押しつけられているのであるから、そう簡単には呑み込めないし、丸呑みにしてもさっぱり身につかない。時間をかけてそれらを十分理解した上で、ふたたび自分の論理の体系や流れから再構成し、自分流

に事実の断片をつなぎあわせてみてはじめて学んだということになる。こうした能動的な組み立て作業こそ重要である。

●設計図作り

問題が決まれば、それに合わせて、論理体系の部品（パーツ）を集めることになる。あらかじめ、自分の直観や先人の説を参考にして、対象の全体をひと渡り見通せるような「設計図、完成予定図、作業仮説」などをつくり、仮の設計図とすることができれば効率的である。

例えば教育学には「開発主義」と「注入主義」という2つの大きな思想的流れがあるが、これなどは全体を見渡す設計図となりうる。「開発主義」とは、学習者の主体性を重んじ、教育とは隠れた能力を引き出すものであるとする考え方であり、ルソーやペスタロッチやブルーナーに代表される。一方、「注入主義」は効率を重んじ、教師の側から既成の知識を教え込む方法であり、ヘルバルトが代表的である。この枠組みは現代のいろいろな教育現象を考えるにあたってきわめて有用である。例えば、受験のための詰め込み勉強は注入主義の典型であるが、大学で学ぶにあたって必要なのは開発主義的な考え方である、というように。

●部品集め

設計図ができれば、著書や論文などいろいろな資料に当り、自分の思考法に合う気に入った部品をどんどん取り入れていけばよい。

パーツの仕入れには、新聞雑誌と図書館の利用をおすすめする。特に新聞の教育関係の記事は丹念に読むとかなり面白い。ジャーナリストは教育現場の情報をかなり集めているので、批判的に取り入れれば、生きた教育学のためには不可欠の資料となる。

本や雑誌にアクセスするには、駒場や本郷の図書館は言うまでもなく、地域の公立図書館などもかなり役立つはずである。

●教える立場になる

このような設計図・パーツ集め・設計図の修正といった試行錯誤を繰り返すと、何とか手作りの継ぎはぎ細工ができあがる。これはまだ借り物なのでほっておくとすぐにバラバラになるので、しっかりしたひとつの体系に定着する必要がある。

そのためには、自分が教える側に回った時どのように話すか、教員と同じ立場で考えてみるとよい。このような論理体系の発表の場や互いの批判の場を提供するのが、大学のゼミナールである。この駒場においても全学一般教育ゼミナールが多く開かれているので積極的に参加することをおすすめする。

あるいは著書を書くつもりでまとめてみることもよい。卒業論文などはその集大成になるはずである。こうすることで、自分なりの論理が一通りできあがり、そうして得たものは一生の財産になるであろう。

東大教師が新入生にすすめる本

丹野義彦（教養学部助教授／教育学）

（東京大学出版会UP選書 1992年4月号から引用）

①私の読書から 印象に残っている本

『はいすく1る落書』多賀たか子（朝日文庫）

『ブリキの勲章』能重真作（良衆社）

『子供たちの復讐』本多勝一（朝日文庫）

『青年期』笠原嘉（中公新書）

現代日本の子供や青年の病理を理解し、教育の問題を生きた現場から考えるために、このような刺激的な本から始めるのもひとつの方法である。

②これだけは読んでおこう 研究者の立場から

『母親剥奪理論の功罪』マイケル・ラター／北見芳雄他訳（誠信書房）

専門的で難解なので取り上げられるのは少ないが、ボールビイを越える母子分離の理論的パラダイムを提示した画期的な本である。このパラダイムは、補償教育・家庭教育・母子関係・母親の就労・小児自閉症の理論などを書き換え、子どもの発達を親の側からみるにあたって大きな示唆を与えてくれる。

③私がすすめる東京大学出版会の本

『教育の原理Ⅰ－人間と社会への問い』堀尾輝久・松原治郎・寺崎昌男編

『教育の原理Ⅱ－教師の仕事』稲垣忠彦・柴田義松・吉田章宏編

多角的なレベルから教育の全体像をとらえ、わかりやすくていねいに書かれた教育学の入門書。各巻末には「読書案内三十選」があり、教育学の読書指針としても大いに参考になる。

『子どもの自分くずしと自分づくり』竹内常一（東京大学出版会、UP選書）

いじめ・不登校・非行というきわめて現代的な教育病理のマクロ的状況論と、「思春期の自我の解体／再編成」というきわめて普遍的なミクロ的精神力動論が融合するところに、教育病理の本質と実践の指針が見えてくる。

時に沿って 青年期の終わり始まり

丹野義彦（教育学教室）

（東京大学教養学部報 1991 年 10 月 16 日号より引用）

駒場に入学したのは 1973 年である。高校のころは、将夫は心理学を学んで青年期の悩みとか「自己」の問題を考えてみたいと思った。駒場では小説を読んだり書いたりすることにのめりこみすぎて降年し（2 年生から 1 年生に降格した）、3 年かかって文学部の心理学科に進んだ。

卒論のテーマは何にしようかと考えていた頃、精神医学の先生（当時医学部助産の町山先生）が講義中に幻覚剤の実験のボランティアを求めており、友人にさそわれ興味半分で行って飲んでみた。幻覚剤は私の「自己」を一時的に解体し、これは私にとって人生観が変わるほど強烈な体験であった。これがきっかけで町山先生に研究指導をうけることになり、「精神病の認知的治療教育」をテーマとして卒論と修論を書いた。修士を出た後は、このテーマを

より本格的に研究するため、町山先生が移られた群馬大学医学部の博士課程に進んだ。博士の四年間は、他のことは何も考えず、一日をすべて精神医学や神経心理学の研究に使うことができ、これまでの人生で最も生産的で充実した時期であった。

博士課程を出たあとは、群馬大に残り、看護婦・助産婦・作業療法士の卵あるいは小・中学校の教師の卵たちに心理学を教えることになった。また、臨床の場面で、いじめが原因で心身症になった女子中学生や、部活のしごきが原因で学校に行けなくなった男子中学生などに会った。こうした教育や医療の現場で求められる心理学と、これまで私が学んできた基礎的な心理学との間には大きなギャップがあり、これをいかに埋めるかでいろいろ頭を悩ませた。こうして、ここ数年、登校拒否・いじめ・部活などの調査や教育臨床にかかわるようになり、私の興味は学校教育の問題へと引き寄せられた。

以上、「時に沿って」私の経歴をスケッチしてみた。形からみると心理学・医学・教育学と、あまり脈絡のないコースをたどってきたことになる。しかし、興味を中心にあっただのは一貫して「青年期」の心の問題である。結局、いろいろ寄り道をしながらも、高校時代の興味であった「青年期の悩みと自己」というテーマから一歩も抜け出していないかもしれない。しかし、不登校・いじめ・薬物乱用・性教育など、これまでの教育学では手に負えないような問題が噴出する今の教育現場に対しては、心理学・医学・教育学のクロスオーバーを企む私のような者も少しは貢献できるかもしれない。また、こうした企ては、学際研究をかかげる駒場の理念とも合致し、私自身駒場に来て大いに心強いものを感じている。